富山大学教養部紀要（人文・社会科学篇），18(1)：37−46，1985.

子供の学校環境としてのオープンスペースの設計

――富山県入善町立上青小学校の事例研究――

The Planning of Openspace as the Educational Environment for Children

桂木　健次，稲垣　保彦，宮崎　州弘[1]，森　　栄[2]
石塚　兼治[3]，相山己紀雄[4]

Katsuragi, K.　Inagaki, Y.　Miyazaki, K.　Mori, S.
Ishizuka, K.　Aiyama, M.

1．はじめに

この稿は，1984年8月における二十一世紀教育の会研究会「いまオープン学習の時代」[1]および1984年12月の日本計画行政学会全国大会[2]における発表稿（レジメ）をもとにして書き足したものである。

われわれは，情報化社会に突入した現在，二十一世紀の国際社会に生きていく今の子供達に対し，教師が教え導びく方法以上に子供が自から問題を探り，解き明かしていく能力を身につけさせていく事の方がより重要だ，との認識に基いて研究を行った。従って，子供をマスとして扱かうことを徹底的に排除し，一人一人の学習進度・資質に合わせた教育の研究開発をはじめ，教育に関わるあらゆる実践上，行政上の問題を自問しつつ，入善町立上青小学校の設計にあたったのである。

2．研究の目的

本研究は，上原・青木両小学校が1983年度に合併統合されるのに先立って行なわれたものである。研究は，役場職員を中心にした入善町教育環境研究会を母体に教師チームを編成し，住民の参加や，われわれ各々の専門家のコミットのもとに行なわれた。研究期間は，1980年6月から12月までの7ケ月間であった。

研究の目的は，短期間には二十一世紀に向けて小学校教育と施設の在り方，そして行政

1）富山大学教育学部，2）入善町教育長，
3）入善町都市計画課，4）スペースシステム建築事務所

の在り方を探ることにあり，長期的には，入善町の教育を多面的に考えながら入善町独自の教育文化を築きあげていくための契機とし，ひいては入善町全体の生活文化を考えていくための一助にしようとしたものである。

かっての計画の仕方の殆んどは，行政と教師，行政と住民，行政と設計者との間で個々ばらばらに進められてきた。その結果，全体としては不明瞭なために実情にそぐわない施設が数多く見受けられる。それは，その殆んどが関係者の研究学習態度，計画の進め方に起因しているように思われるのである。

本来，施設の計画は，教育的要求に基づいて行なわなければならない。また，その教育は，町全体の教育文化の関係の中から構築される必要がある[3)]。そのためには，教育的要求とはいかなるものかを先ず見定める必要がある。それは子供に影響を及ぼすもの全てである。カリキュラムや施設は勿論のこと，自然環境や社会環境，教師や父母，子供自身の資質や考え方，ひいては行政の在り方までもがその対象となってくる。

参加者はその考え方に基本的に合意することができた。

個々の研究や，問題解決のための努力は今までにもそれぞれの機関などで行なわれてきている。しかし，今日より重要なことは，個々の研究や問題解決はさらに進めながらも，同時に，それらの研究や問題とは別の問題などとの相互関係における問題点を探り，構造的に解明して科学性を持たせることにある。解明のための基本的態度は，現実をありのままに直視していくこと以外にはない。その為には，子供に影響を及ぼすと考えられるものを総合的に見通す作業が必要であり，さらにはそれらの全てのデータ化が大前提となる。このことは必然的に拡散化現象を起こし，教育環境を越えて，町全体の生活文化の問題にまで発展しよう。ここに至って始めてある程度の教育文化の構造的把握が可能となる。何故なら，教師と子供と父母，カリキュラムと施設，交通問題と遊び場，教育文化と予算など，あらゆる問題データがそこには揃っているからである。ここで，ある程度というのは，これらの問題が自治体と国との関係のように，さらに広がりを見せるだろうことが容易に推察できるからに他ならない。また，個々の問題の相互は，優劣・大小とは無関係に，総合的に扱かわなければならない。

構造的把握が可能となったデータにより始めて，我々は真の問題解決に向けて一歩踏み出すことが可能となったのである。

この研究の最大の意義は，目的達成のためには，関係のある全ての事柄の相互関係を構造的に把握することが前提となるという今日的な視点を持って，実践的に行動を展開していくことにある。それは，研究会の在り方・方法などを自から研究していくこととも関連しており，町づくりの重要な基本原則でもあった。

学校とは，適切な環境を与えて児童生徒の心身の発展を助長させることがその目的とされているが，そこでいう環境とは，教師を中心とした人的環境と，建築を中心とした物理的環境とに分けられ，これらは互に，相関関係にあって総合されて学校環境を形成する。

従って，建築・設備は単に教育を行なう場所でなく学校教育の意図をこれらに託し，それ自体に子供達の心身の発達を助長させる要因，雰囲気を持たせるよう配慮されていなければならない。

しかし，現状の学校建築を見ると決してそうした条件を満足するものではなく，むしろ教育の中味と全く違う観点から考えられて建築されているような面さえある。

地域社会の文化的中心の役割を持った明治・大正期の木造校舎が耐久性のある鉄筋コンクリート造に置き変った事は，大きな変化であった。しかし，これは物理的変化であって，木造時代の標準的な校舎平面が鉄筋コンクリート造に置き換えられた多くの状況を見れば，教育の内容に対応する建築の機能は基本的には変化しなかったと見ることができる。計画・建設者から見た従来の学校建築は，他の建築物に比べて，これ程味気ないものはないというのが一般的見方であった。しかし，これには幾つかの理由が現実的にはあったようである。

1947年，教育基本法が制定されたその頃，文部省から学校建設に当ってモデルプランが作成された。それは必ずしもそうしなさいと言う限定されたものではなかったにも関わらず，次第に全国に波及し，定着していったのである。これが現在もなお続いている4間×5間の普通教室群，特別教育群に廊下を添わせたいわゆる片廊下形式の学校である。

近年もひきつづいて木造校舎が鉄筋コンクリートの校舎に生まれ変わりつつあるが，しかし，この基本的な平面形に変わることがない。これには特に理由が見当たらない。その時点で現場教師の方からも，行政当局の方からも特に問題が提起されなかったからである。ということは，設計者が新たに学校を設計するにあたり，特に新しいデータが与えられなかったことになる。とは言うものの，先程も述べたように学校建築程味気ないものはないという思いは，設計者であれば恐らく誰しもが抱いていたに違いない。多くの設計者がその時点で自問自答し，新しいスタイルにチャレンジしようと試みたことであろう。しかし，私立の学校ならまだしも，公立では現実に乗り越えなければならない問題が数多くあり，一つ一つが非常に大きな障壁になっていることは間違いない。まして，設計者に新しい教育に関するデータが現場教師から提示されない以上，従来の木造校舎を鉄筋化するだけで何ら平面に変化がなかったのは無理からぬことだったのであろう。

事実，我々が学校の設計をするにあたり，「どのような学校にしたいのですか。」と尋ねると，大半の教師からは採光を充分に採り入れ，危険性がなく，また掃除がしやすいといったような実に味気ない答えが返ってくる。我々が知りたいのは，そのようなことも大切であるが，むしろあなた方はどの様な教育方法を持ち，どのような授業を展開しようとされるのかということが先ず知りたかったのである。

今日，教育とこれを支える物理的環境としての学校建築も徐々にではあるが変わりつつあり，また，変わらざるを得ない多くの条件・要素が急速に蓄積されてきている。

学校教育は，従来の一斉学習中心から一人一人の子供の能力を最大限に引き出すグルー

プ別，個別学習に重点が移行しつつあり，こうした教育方法の変化に，建築がどのように対応するかが今後の学校建築の重要なポイントとなると考えた[4)]。

3．研究の推移

(1)　設計のあり方

一般に施設作りは，企画→基本計画→基本設計→実施設計→工事監理の手順で進められるが，これまでの建設プロセス上の問題として厳しく指摘されなくてはならない共通の問題点は，企画から基本設計という段階が全くといってよい程欠落していることである。十分検討された設計条件を与えず設計を委ねるような容易な方法では，目標達成は望むべきもなく，十分調査し聴取し，そして討論しあい，全体から部分にいたるまで新しい空間を創造するという施設計画のあり方をたださねばならない。

小学校の建設を考える時，我々の立場でいくら教育の原点に立って考えようとしても，それは学校の実態を知らない観念論にすぎないとしてなかなか受け入れられないものである。しかし，今日程人間として，又，プランナーの職能としての危機を感じたことのない我々にとって，せめて小学校建築の設計を通して教育の本質を叫び，建築にその本来あるべき姿を取り戻そうと考えるのは必然である。

学校建築は従来，形が一定しており，意匠，構造も特別に考えることもない。いわば誰もが手がけることのできる手頃な建築と考えられがちで，その設計も容易に行なわれてきた。しかし，最もむずかしい建築が住居であるように，学校を人格形成の直接的に影響する建築と意識するならば，学校建築ほど人間として責任を負わなければならない建築はない。従って学校建築の設計は，豊かな経験と人間を哲学し人生を考える教育者としての設計者によらねば本当の環境を創造することはできないのかも知れない。

(2)　教育環境研究会

上青小学校の計画に際しても，現在学校建築が置かれている劣悪な状況を見るにつけ，なんとかせねばという心のあせりがあり，対応に苦慮していた。

当時我々のある者たちは，保育所研究から発展させた教育施設研究会を作り，ライフワークとしての教育施設問題を体系的に調査していた時でもあり，日頃から社会ストックとしての建築のありかたや，その中で設計者のはたすべき役割等について話し合っていた。上青小学校の企画・設計の段階では，町の理解も得られ，役場チーム，教師チーム，建築家チームから成る入善町教育環境研究会が発足し，住民参加による小学校研究がスタートしたのである[5)]。それには二十一世紀教育の会からの教育に関する指導と参加協力もあった。

住民参加は単に流行にのったものでもなければ，建築のための情報提供者として扱ったのでもない。あらゆる計画がうるおいのある町づくりの一点に集中されるべきであると考える我々にとって，住民参加とは住民自身のための市民自治の確立のためであり，また，その事が新しい時代の建築を保証してくれると考えたからである。

研究会が究極の目的にしたのは，前にふれたように「入善町に根ざした教育環境を築く」という事であり，問題の大きさからして，研究は本質的にはおわりのないものになり，時間の制約上関係者との意見の調整が不完全なまま基本計画に入らざるを得なかった。それでも大量のデータが収集できた。住民のアンケート，ヒアリング，二十一世紀教育の会・亀田佳子先生や，アメリカ・ノーステキサス大学のB・E・シュミット教授などの講演や教師との懇談会，先進類似施設の視察・町内の関連施設の利用状況，研究会メンバーの協議などの幅広い活動により多くの成果があった。

これまでに体験したことのない異種業種との体験的実践は，それぞれ，考え方・方法論が違うため至るところでとまどいがあり，コンセンサスを得るためには時間を必要としたが，教育環境研究会の考え方は，基本的には，受け入れられたのである。事前調査の必要性は各方面で叫ばれているが，いろいろな理由で省略されることが多い。あってもそれは，ビックプロジェクトに限られており，そこには学識経験者と呼ばれる人たちが中心人物として登場してくる。その点今度の場合，地元の生活者を中心にテーマが編制され，スケジュールが組まれたことは意義深い。それだけに思いがけないトラブルも当然予想されたであろうが，われわれの後楯になって静かに成り行きを見守った町の姿勢には，新しい町づくりの萌芽（ほうが）を感じるのである。

(3) アメリカの教育

上青小学校の建設調査の中で，我々はアメリカの教育事情を視察することになった。相山と石塚の両人が，当時ウイスコンシン大学にフルブライト中の国立教育研究所の加藤幸次教授の通訳と案内により，4都市10校にわたって視察したのである。いずれも広大な敷地に恵まれた環境の中に，完全空調設備の学校建築をなし，何よりも教材の質・量・施設設備など教育環境が圧倒的に充実しており，その中で選択学習をする子供達の生き生きとした表情が印象的であった。

この国の教育機構は，各州にある教育庁が自州の教育についての水準や規則を定めており，その範囲の中で各市町村の教育委員会が独自に自由な規則や権限を執行している。このことは，教育というものが元来，そのコミュニティの必要と要求に応じてサービスする機関であり，そのコミュニティの単位によって自分の教育を決めるべきだと言う基本原則をアメリカ全体がもっているからだと考えられる。

この国は，名国からの移民によって構成されており，多種多様な文化背景の異った国の子孫を含んでいる関係上，それぞれの人種，文化，宗教に応じた教育の必要性が現在の柔軟な教育制度をつくりあげた最大の理由だと考えられる。考え方が型にはまらず，問題を解く方法を知ることが知識の蓄積よりも大切であるとの考え方が一般的であり，子供は正しく推論し，十分調べることを教えられれば，これからの人生に必要なことは何でも見つけ出せるとアメリカ人は信じている。

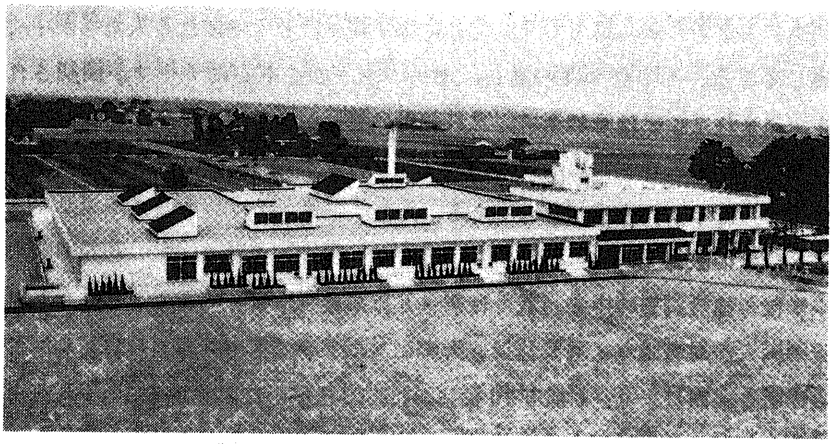
また，子供達の親は，学校との関わり合いが非常に強く，教科課程・予算・給料・学校

設備などについて話し合うため定期的に話し合いを持っている。さらに母親たちは，ボランティアで授業や放課後の活動に積極的に参加し，学習や教材作りの手助けをする。教師の監督の下に，定期的に時間をさいてクラスで遅れている子と一緒に勉強している母親もいた。

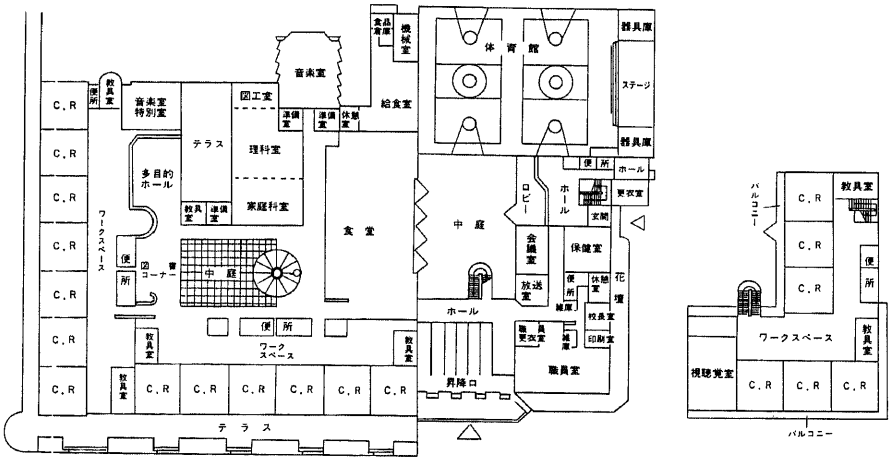
子供の幸せのために家庭と学校の両方の教育，しつけに最大限の努力がなされており，可能性のある能力を最大限に引き出し，一人一人に市民として社会人としての意識を持たせようとするアメリカ教育の根本を学んだのは多くの参考となった。これについても，別の機会に改めて稿をまとめる予定である。

４．研究の成果および小括

上青小学校は，現在の教育方法にも，あるいはオープンエデュケーションにも対応でき



［写真１］　入善町立上青小学校の校舎全景



［図１］　入善町立上青小学校の平面図

る校舎として設計されている［図１］。オープンスクールを決して目新しさを打ち出して取り入れようと考えたのではない。十分に状況を認識し，教育のあるべき姿をもたない限り

オープン化はできないと考える。

子供達が人間形成の重要な時期を過す学校施設としての教育環境がいかにあるべきかを今日的視点でとらえた時，それは，上青小学校の校舎スタイル［写真1］に，作り上げら

〔表　1〕　上青小学校の建設経費および施設概要

構造・規模	校　舎	鉄筋コンクリート造2階建	4,861m^2	
	給食室	鉄筋コンクリート造平屋建	153m^2	計 5,503m^2
	食　堂	鉄筋コンクリート造平屋建	489m^2	
	体育館	鉄筋コンクリート造平屋建	1,024m^2	
工　　期	校舎棟	着　工　昭和56年 9月 3日	完　成　昭和57年10月30日	
	体育館棟	着　工　昭和58年 6月14日	完　成　昭和58年12月10日	
事　業　費	建　築　費	校　　舎		
		給　食　室	914,900千円	
		食　　堂		
		体　育　館	176,200千円	
	外構及附帯工事費	グランド造成	41,630千円	
		外　　構	48,939千円	
		附　　帯	6,855千円	
	用地購入費		139,556千円	
	設　計　費		24,180千円	
	計		1,352,260千円	

［写真2］　低学年（1～2年）教室前のオープンスペース

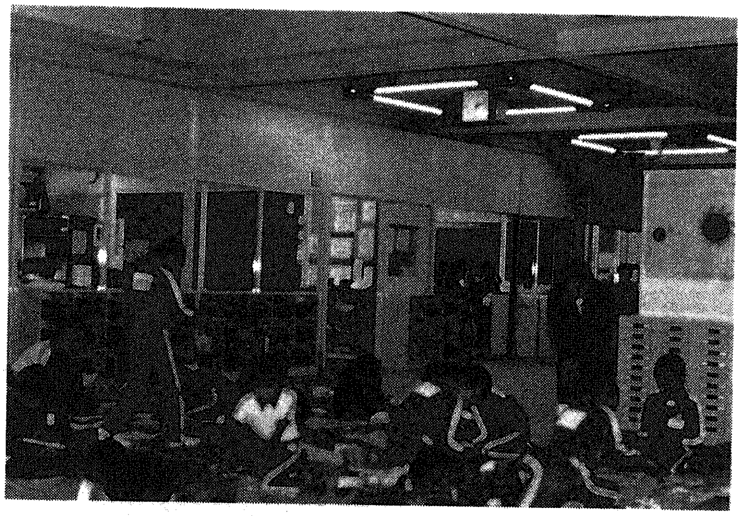
れた。同校は1983年の4月開校したが，今後は，教師達がその校舎を使って実践を行なっていき，きたるべき次の学校の開校には多くのデータが揃うことになろう[6)]。

省りみると，明治初期，近代的な学校制度が欧米から導入された時代には，当時の関係者は，今日では信じられない程の情熱を注ぎ込んで学校を作りあげている。我々のとりくんだ上青小学校も［表1］のように巨額の財力を投入されている。それは，まったく容易にでき上ったものではなく，数々の関係者の意見がまとめあげられ，これまでの施設づくりと違った手続きを経て生まれた「しあわせな建築」である。

さて，我々が「オープンスペース」という時，従来の方式を克服した概念を包含しつつ，

さらに多様性を保障するものと理解したい。

今日学校を設計する時，①一般的学習スペース（普通教室）②音楽室などの特別教室，③小会議室などのクワィエットルーム④ワークスペース⑤多目的利用のオープンスペースなどが必要である。ここで視点を変えて，学校全体をオープンスペースとして捉え直してみたらどうだろう。そうすると今迄拠点として位置付けられていた普通教室は，むしろ，特別教室として捉えられてくる[7]。一斉授業も単に一つの授業スタイルにすぎなくなってくる。色々あって良いと思われるのだ。オープンスペースは，従来の片廊下形式の場合の廊下の面積が全面積の３割程をしめていることから，従来の予算や面積の枠内であっても工夫によっては，その一部を割愛することによってオープンスペースとすることができる



［写真３］　中学年（３～４年）教室前の
オープンスペースを使った図工の授業

と判った。上青小の場合も，それほどに割高とは必ずしも言えないのである。

上青小学校の調査は，半ば運動として展開せざるを得なかった。調査の意味したことは複合的で，一言で言い切ることは難しいが，おそらくそれは，参加者それぞれの心の中に余韻として残っているに違いない。

住宅を含むいかなる建物も，その狙いとするところを時間をかけて住民に明確にしておくことは非常に重要なことである。さらにはその運営の方法を計画し，周囲に対しても配置しておくことが，建築が建築として成り立ち得る最小限の条件であろう[8]。それは，具体的な表情となって道行く人に町並みとしての感銘を与える。逆に言えば，今見られる町並みは，過去において人間がどのような手続きを踏んできたかを暗示しているのである。われわれも，次の時代の町並みを築いているであろう生活者として，絶えず気を配ることをおこたってはならないのである。

なお，この研究にあたっては，文中の方々の他に，新旧入善町長両氏の力添えはじめ，役場スタッフや小島覚・中藤康俊・阿原稔・田中節男各氏の調査協力を得ている。また，

日本計画行政学会中部支部からは，研究助成の対象にも選ばれた。関係者各位に謝する次第である。（おわり）

注および解説

1）相山・石塚「富山県入善町立上青小学校の設計」，21世紀教育の会主催研修会，『いまオープン学習の時代』，1984．8

2）石塚・相山・桂木「住民参加による小学校建設―上青小学校（富山県入善町）の事例研究から―」，『日本計画行政学会第7回全国大会発表予稿集』，1984．12

3）かつてから「地域性についてどう考えるか」という問題について窮したことがよくあった。仕事柄・研究上よく使っている言葉ではあるが，改めて問われてみるとなかなかの難問である。多雪地帯であるとか風景にマッチさせるということぐらいはすぐにでも思いつくのであるが，そのような配慮をもってだけでは地域性があるとは言えまい。それは開発と設計者の論理であって，ユーザーの論理とは，しばしばかけ離れたところにある。その場合には，双方が時間をかけて歩み寄ることが必要になる。

だが地域性というものにはおよそ縁遠いと思われるものに学校建設がある。どちらの論理からも置き去りにされた今や，最も時代遅れの建築であろう。全国どこを歩いてみてもそう変わりばえのしないこの種の建物がなぜにそうなのか。この現象をいつも不思議に感じていたのである。そうせざるを得ない法でもあるのかと調べてみたのであるが見当たらなかった。とすれば直接にかかわりを持つ地元の人たちの手によって自由に扱われてもよいはずである。

4）脳の発達段階に知的発達段階というのがある。人間は生まれてから10カ月間程の感覚の段階を経た後，二十歳位までに前操作，具体操作，形式操作という過程を経ながら成長していくものらしいが，これには，大変な個人差があるのだともいう。例えば，新聞が理解できるようになる形式操作の段階では，早い子どもでは十一歳には，また遅い子どもの場合には十七歳位にならないと到達しないらしい。こうなると現在の一斉授業というのは，同じ年齢の者どうしで群を作って授業を受けているのであるが，逆に言えばそのように無理失理受けさせられているといった方が当たっているのかもしれない。ところで，最近にわかにオープンスペースを採り入れた学校が建設されるようになった。そこでは一斉授業から能力別授業へと重心を移動させていこうという動きも見られる。そこには日本全国，世界各国との交流を重ねるなど，地道でしかも実践的な努力を積み重ねている「二十一世紀教育の会」の存在が契機になっていることを見過す訳にはいかない。二十一世紀の国際社会に，中核的な存在として日本を背負っていかなければならない現在の小学生を，教え導いている今の教育方法を今一度問い直し，グローバルな視野を持った人間に育てていかなければならないということが急務である，という判断がそこにある。

一人の教師が教壇に立ち，45人の生徒がそれを聞いて学ぶという一方通行の今の授業では，この多様化・情報化の社会にあっては，教える教師の方に先ず限界が出るだろうし，一方の生徒は絶えず受動的で，準備された枠内でしか行動しないであろう。それよりも生徒自ら問題を探り出し，あらゆる方法で解明していくような能動的な人間に育てあげることの方がより重要だと思う。

5）それぞれの専門を通しながらもネットワークとして考えていこうというものである。過去にこのような場が設定されることがなかったことや，双方にとって相手が異業種となるためか共通言語が少なく，当初はとまどいもあった。それでも教師チームは自らの指導方法や父母との在り方を問い直し，行政チームは父母に対するアンケートやヒアリングを行い，また行政の在り方を問い直すなど精力的な活動が展開された。「なぜ学校で歯みがきのしつけをする必要があるのか」「落ちこぼしなのか落ちこぼれなのか」「学校の大部分は公民館としても利用できるのではないか」「アメリカでは個別指導が中心なのに日本ではなぜ一斉指導なのか」「農地を壊してどのような影響が出るのか」。われわれは混とんとすればするほどよいと思ったものである。何かが変わるはずである。少し考え方が整理されかけたころである。「そのような学校は学校ではない」との一町民の強硬な反対意見に出合い，「入善もか」と全員一時は絶望感も漂ったのであるが，その町民自らの学習で次第に態度を軟化させ，最後には，逆によき理解者となってくれたことは幸いであった。

6）上青小学校の校舎は，教室，ワークスペース，学習センター，特別教室，教師コーナーをひとつのセットとして組み合わせたもの。従来のハーモニカ型の校舎にはない子供同士や子供と先生との触れ合い，グループ別学習や個別学習に最重点を置いた設計である。従来の校舎に慣れた教師も，新しい校舎の活用に戸惑いながらも，先進地の学校視察に出かけるなど，教育方法の改善に積極的に取り組んでおられる。文部省も，1984年度からオープンスペース校舎の必要性を認め建設費の補助に踏み切った。我々の苦労も少しづつ報われた感じである。

7）上青小校舎の特徴は，子供同士の触れ合いを考えると平屋建てが最適であるが，一部二階建てになっている。廊下をなくし，ワークスペースとして広い空間を取り，先生がいつも子供たちと接触できるようなコーナーを各所に設け，校舎の中心には学習センターを置いた。ワークスペースはグループ学習，個別学習の場に，学習センターは子供たちが絵を描くなど好きなことができるようにしたわけである（[写真3]参照）。

8）上青小も，20年後～30年後の教育のことをも考えて設計した。まずソフト面があってこそ，ユニークな設計，建築ができるわけである。学校づくりへの住民の参加は欠かせなく，子供たちの立場に立ち，将来の教育をしっかりと見据えて，徹底して話し合うことが何よりも大切だと思っている。

参考文献

・西山研究室・京都府立大住生活研究室「神戸市における子供の遊び場と学校公園の利用実態に関する調査研究」，神戸市『市政調査』No.17，1973. 3
・T＆K総合研究所『入善町南部地区コミュニティセンター基本計画』，1975
・学校施設開放構想に関する研究会『地域社会創造をめざす学校開放への課題とその将来構想』1，1976. 4
・同『同上』2，1977. 9
・松原治郎編著『コミュニティと教育』，学陽書房，1977. 10
・入善町教育委員会『杉沢の沢スギ』，1977
・入善町『入善町総合計画に関するアンケート調査報告書』，1977. 12
・亀田佳子『オープンエデュケーション：ひとり学びの上手な子に』，あすなろ書房，1978
・入善町教育委員会『公民館のしおり』，1979
・宮地誠哉「学校改革／その一：組織改革」，『教育学構座』1，学研
・入善町『'79統計にゅうぜん』，1980
・入善町『入善町勢要覧』，1980. 4
・入善町『年間指導計画』，1980. 4
・入善町教育委員会社教課上田卓治『学校開放に関するヒアリング』，1980. 5
・入善町教育委員会『入善町民大学テキスト』，1980. 6
・入善町教育委員会『社会教育の概要』，1980
・入善町教育委員会『'79青年学級リーダー研修リポート：火の国』，1980. 4
・21世紀教育の会『教育人』No.100，1980. 6
・入善町『広報にょうぜん』，No.274，1980. 6～
・入善町教育環境研究会『入善町立上青小学校建設のための調査記録』，1980. 12
・入善町『新総合計画のための全世帯アンケート集計結果表』，1982. 6
・入善町『新総合計画のための住民のつどい，討論記録集』，1982. 6
・入善町『新総合計画のための職員提案集』，1980. 6
・入善町『入善町総合計画第二次基本計画』，1983. 1
・入善町教育委員会『町立上青小学校』，1983. 12
・入善町立上青小学校『管理指導計画』，1984. 4
・稲垣忠彦編『子供のための学校：イギリスの小学校から』，1984. 6
・入善町立上青小学校『学習指導案』，1984. 10
・入善町立上青小学校『研究紀要：自らめあてに向って実践する子供の育成』，1984. 10
・入善町『情報公開』，1985. 1